

肥筑方言表現法における「は」助詞の運用

岡野信子

はじめに

提題の助詞「は」を他助詞に添えて用いること、また述部を「>」は……」形式に言うことは共通語表現の上にも見られるが、肥筑方言にはことに著しい。たとえば「方言文法資料図集1」（国立国語研究所一九八一年）を見ると、13「それはどこにでもある」に、肥筑域では「ドケデッチャ」を答えている。また41「無理に行かないでもよい」に「イカンデチャ」を、42「行つたつてだめだ」に「イタツチャ」を答えているのは主として肥筑域で、鹿児島・宮崎両県にも見えている。

共通語の「も」相当の「は」を言うことがあり、さして強調心意のない時にも「>」は「を言いがちであることは、肥筑方言表現法の一特質である。小稿では、以下のように「は」助詞頻用の表現法状況を見ていきたい。

- 一 事物提示の「は」助詞の姿
- 二 格助詞に添うて働く「は」助詞
- 三 係助詞・副助詞と熟合して働く「は」助詞

肥筑方言表現法における「は」助詞の運用

四 接続助詞末尾に働く「は」助詞

五 バシとバッテン

六 述部内に働く「は」助詞

限られた紙幅にできるだけ多くの文例をあげることと努め、説明は極力控えたい。とりあげた文例は一九五六年から一九八六年の間に得たものである。文例に添えた地点名の（福）などは県名の略記である。ここにあげた地点名の中には、調査時以降に改称されているものもあるが、ここには調査時の地点名を記している。ただし志賀島の調査は糟屋郡時代にも行ない、福岡市編入後にも行なっているので、ともに福岡市としている。

一 事物提示の「は」助詞の姿

体言や準体助詞につづく助詞「は」が上接語の末尾音と熟合することは、共通語表現の発音の上にも見られるが、肥筑方言においてはその現象がことに著しい。たとえば準体助詞「ト」に「は」が続く時は、老・中年層の発音では、つぎのように「ター」、「タ」となるのが普通である。

・ネルター ヨー ネマス ガ。(福) 嘉穂郡小竹町口ノ原 老女

↓筆者

(この子は) 寝るのはよく寝ますよ。

・ワタシヤ モー カツガツ ムカシンタ ワスレテ シマウケ。

(福) 福岡市志賀島弘 老女↓老女

私はもうつきつきに昔のことは忘れてしまふから(だめだ)。

また体言につづく時も、「シナモナ」(品物は)、「ソリヤ」

「ソラ」(それは)、「トキヤ」(時は)、「カニヤ」(金は)のようになる。

筑前東北端の旧若松市島郷地区でよく聞く、「チューワ」、「チュワ」(というは)は、「というこは」相当でもある。

・イツチューワ ネー、イツモカツモ タタキヨラ ナ。(福) 若

松市脇の浦 老女↓老女

いつときまったことはない、(太鼓を) 始めたたいているよ。

・ヒチリンチュワ ナシ ユージャロー カ。(福) 若松市岩屋

老女↓老女

七輪(土製のこんろ)とはなぜ言うのだろうか。

ところで「は」は、末尾が撥音の語に続く時は、いわゆる連声現象で「ナ」となる。

・ライネンナ ボクガ キンシヤイ。(福) 福岡市志賀島志賀 少

男↓筆者 来年は僕の家に行らっしゃい。

・マケチカラチューモンナ ムゲー モンジャッタ。(福) 若松市

脇田 老女↓筆者

戦争に敗けたってことは苛酷なものだった。

また、つぎのように、「を」格表示の「バ」を言い、これが「をば」(を・は)から出ていることもよく知られている。

・キューバ スエン ナイ。(福) 八女市柳島 息子↓父

お父をすえないかね。

・ソリバ トリゲイテ……。(福) 福岡市志賀島弘 老女↓老女

それを取りに行つて……。

二 格助詞に添うて働く「は」助詞

1 〈オバ〉(を)ば

・ナワオバ バンニ ナイヨリマシタ。(福) 甘木市安川町 老男

↓筆者

縄を腕になっていました。

・ソレオバ タニ スル トキニ……。(福) 宗像郡大島村 老男

↓筆者

それを田にする時に……。

このように「オバ」を言う地には先出の「バ」も聞かれる。「バ」にくらべて、「オバ」にはあらたまり意識、また強調意識が感じられる。

2 〈ニヤ・ナ〉(に)は、〈ジャ〉(で)は、〈ヨリヤ〉(よ)りは、

チャ(と)は、テチャ(と)ては

・コッチサイニヤ オロー キマス タイ。(佐) 唐津市神集島

老女↓筆者

(魚が) こちらの方には少ししか来ませんよ。

・ヒチジナ シヤツチ デテ イキマスケ ネー。(福) 遠賀郡岡

垣町吉木 老女↓筆者

七時にはかならず家を出ていきますからねえ。

「ニャ」が「ナ」と直音になることはまれである。

カウナンチュー コター マエジャ アリマツシエン モン ナ

1。(福) 福岡市志賀島弘 老女↓筆者

(おもちゃを) 買うなどということは、以前はありませんからねえ。

「マエジャ」(前では) は、「マエニャ」(前には) とも言う。

ウチデ ショーヨリヤ タノンダガ エー。(福) 若松市竹並

老男↓中男

家で造るよりは頼んだほうがよい。

アツカツチャ イワン ネー。アツイチ イーマス ネー。

(福) 飯塚市花瀬 中女↓筆者

「暑か」とは言わないねえ。「暑い」と言いますねえ。

エドチャ エサデ ゴザッスル。(福) 若松市岩屋 老男↓筆者

「エド」というのはえさのことです。

ツレンオチャ フネガ カールイケンド。(福) 若松市岩屋

老男↓筆者

船の進行方向に流れる潮のばあいは船が軽いけれど。

アリガー ナンテチ ユー カナー。ガンセキテチャ コッチノ

アダナバツテ。(佐) 唐津市神集島 老男↓筆者

あれの名が(共通語では) 何というかなあ。「ガンセキ」というのはこちらでのあだな(地方名) だけだ。(するめの) ようなものを指しての説明)

肥筑方言表現法における「は」助詞の運用

「は」が上接格助詞と熟合することは共通語音声の上にも見られるが、「チャ」、「テチャ」には方言色が濃い。これらには「言う」を内在させているものもある。

三 係助詞・副助詞と熟合して働く「は」助詞

1) くサ(こそは)

以下の文例に見られるように、肥筑域では「クサ」がさまざまに運用され、多用されている。藤原与一先生は、「クサ」は「こそは」であろうと言われた。語頭音節の狭母音化も、「は」助詞の熟合も、この地域ではごく自然な発音現象である。

ヨークサ オイデナサイマシタ。(福) 糸島郡志摩村 老女↓筆者

者

よくいらっしました。(迎えの挨拶)

イマクサ ゲタ カイ イク コトモ イラナ、ソラ アンキナ

モンバツテ。(福) 飯塚市八木山 老女

今は(正月が来ても) 町まで下駄を買いに行く必要もなく

て、ずいぶん気楽なことだけだ。(以前はそうではなかった)

これらの「クサ」は係助詞である。

ノギクノ クサ、キレーカト。(福) 福岡市志賀島志賀 少女

↓筆者

野菊がね、きれいなよ。

「クサ」はこのように間投助詞としても多用される。

ソリヤ ソゲン クサ。(福) 八女市柳島 老男↓老男

そりやそうだよ。

このように文末詞として用いられることも多い。

筑後南部域では、問投助詞の「クサ」「クサイ」が前接部と熟合して、

・イワイサンノ マエモツ サノ、ローソクワ ソーニタテテ……。

(福) 八女市柳島 老男↓老女

(お堂の) 位牌さんの前もねえ、ろうそくはたくさん立てて

……。

・ソレデッ サイ、ヨミヨガツ サイ、キョーイクモ シランケンデ

……。(福) 八女市柳島 老男↓老男

それでね、(祝辞の) 読みようがね、教養がないもんだから

……。

のようになることも多い。

・ヨカサツサ デトラシタ モン。(福) 八女市室岡 老女↓老女

(あの人は) かなり長く(他地に) 出ておられたもの。

「かなり長く」の意の慣用句「ヨカサツサ」は、形容詞「ヨカ」に体言化接尾辞の「サ」を添えた「ヨカサ」に「クサ」が熟合したものであろう。

2) 〈テチャ・デチャ(とては)

・ソゲン コタ イケジリサンテチャ ワカラン タイナー。

(福) 直方市植木町 老女↓嫁

そんなことは池尻さんでもわからないよねえ。

・ホーシノゴト アルコタ イマテチャ アリヨリマス。(福) 三

井郡小郡町 老女↓筆者

法事のようなことは今だって行なわれていきます。

・ヤツパ イマデチャ ユーヨ。アットサマツテ ネー。

(福) 福岡市志賀島弘 老女

やはり今でも言うよ。「アットサマ」ってねえ。(「アット

サマ」は、辞去時、はきものをそろえてくれた見送りの人への謝辞である。)

「デチャ」は、福岡市とその周辺域とでは、「アサレチャ」(朝だ

つて) のように、「レチャ」ともなる。また糸島郡の志摩村では

「ドコマデチャ マイリマス」(どこまででもまいります) と「テ

チャ」の「テ」の落ちることもあった。

共通語で「とても」「でも」「も」の立つところが「は」であ

るところに特色が見られる。唐津市神集島では、「シマコトバテチ

オナシ コツ タナ」(島ことばだつて同じことだよ) のように、

「は」のない「テチ」も聞かれた。

3) 〈ハッチャ(はかとは)

・サンズンハッチャ ツミマッセン。(福) 甘木市安川町 老男↓

筆者

(秋月に雪が五寸積もる時、ここは) 三寸しか積もりませ

ん。

・フタリハッチャ オラン。(福) 遠賀郡芦屋町 老男↓老男

二人しかいない。

「ハッチャ」は九州域ではむしろ豊日方言の助詞のようで、肥筑域

内では、甘木市、遠賀郡、北九州市など、筑前東部域でしか聞いて

いない。

松尾捨次郎博士は『国文法論纂』（文学社 一九二八年）四一九頁に、『浮世風呂』『七偏人』中の文例をあげて、「ほかがはきやとなり、はつちやとなったものであろう」と説かれた。ところで藤原与一先生著『瀬戸内海言語図巻 上』（東京大学出版会 一九七四年）の23「これしか」の図を見ると、内海中部以西に「ハカニャー」「ハカチャ」の類がいくらかあり、「ハチャ」「ハッチャ」がかなりよく分布している。九州の周防灘沿岸域は「ハチャ」「ハッチャ」「ダケハッチャ」である。また香川県本島には「ハカタ」がある。このような状況を見る時、「ハッチャ」は「はかと」とは「は」と察せられる。

4 〈ナンチャ（なにとは）、〉ダキヤー（だけは）、〉
ドマ（どまは）

。ドロボーナンチャ オリマッセン。（福）直方市植木 老女↓筆者

者 どれぼうなんかいません。

共通語の「ナンカ」が「なにか」から出ているのに対して、「ナンチャ」は「なにとは」である。

。クマンチヨダキヤー アンター マーダ タンジェン キトル
モン。（福）八女市柳島 老男↓人々

くませみだけはねえ、まだ丹前（どてら）を着ているもの
（夏だというのに）

。キョードマ イコー カイト オモートルバッテン。（熊）球
磨郡五木村中村 老女

今日あたり行こうかと思っているけど。

肥筑方言表現法における「は」助詞の運用

このように係助詞・副助詞にも「は」を熟合させて言うことが多い。

四 接続助詞末尾に働く「は」助詞

1 〈モンバ（ものは）、〉

。サムカモンバ シカタナカ ヤネ。（福）八女市 青女↓青女
寒いんだもの、しかたないじゃないの。

この一文は着ぶぐれてしていると笑われて反駁し理由を言いたてているものである。理由を言う接続助詞には一方に「ケン」があつて、「サムカケン オー キトツ トタイ」（寒いから多く（何枚も）

着てるのよ）のように言う。「ケン」が冷静に理由を言う助詞であるのに対して、「モンバ」の理由の言いたてには心情訴え性が濃い。

。ウモシテ ノサンモンバ ウーメシクヤ 五ヘン 六ヘン クヨ
ーッタ ナイヤ。（うまくてたまらんから、大飯食いは五回、六

回も食べていたねえ）（「八女市広報」へ一九八四年）掲載の
「八女の方言」④へ八女郷土史研究会）

これは少年のころの英彦山講の夜の楽しさを回想している一文であるが、心情訴え性の強い「モンバ」はこのような回想文の中に多く

現われる。また詠嘆の情を託して文末に置かれることも多い。

「モンバ」の出自は「ものは」であろう。文献上の「ものは」は、「月夜に出でて行道するものは、遭水にたふれ入りにけり」

（『源氏物語』明石巻）のように見えていて、「なんと……するものだから」（『岩波古語辞典』）の口語訳があてられている。

「モンバ」については、へ「モンバ」とその周辺（西日本
国語国文学会会報―昭和六十・六十一年度合併号）にもいくらかの

ことを記した。

2) モンジャ(ものでは)

「モンジャ」の文例は神部宏泰氏の「肥前佐賀方言の特殊条件法」(『兵庫教育大学研究紀要第2巻』一九八三年)からお借りした。

・ホダレノ サガツタ モンジャ ヒヤカ ハズ ターイ。

(佐) 北山 老翁同士

つらが下ったんだもの、へだから寒いはずだよ。

・ショクインシツニ チカカ モンジャ、スグ シェンシェーノ

コラス モン。(佐) 北山 小学生同士

職員室に近いんだもの、へだからすぐ先生が来られるんだよ。(教室と職員室との近さを嘆く。存分に騒げない)

神部氏はこのように用いられる「モンジャ」を、「深い情意に根ざす表現形式」と説明していられる。「モンバ」「モンジャ」に情意性が強いのは、「モノ」の働きであろう。神部氏はまた「モンジャ」を「いわゆる中止形式」と言われる。私は「モンジャ」を「ものでは」と考えてみるのであるが、いかがであろうか。

たとえば唐津市神集島では、「ウシャー イソガシカ モンジャ アルケン ナー」(牛を飼っているといそがしいんだからねえ。牛の世話に一人かかりきつていなくてはならない。)と聞いた。また熊本県の五木村では焼畑作業の話の中で、「アノー クートガ

モクテキデー ヤルモンジャツデ グルリアタリ ゴーリン シテ アツテモ カマワデナ……」(あのう、食糧を得ることが目的であるもんだから、まわりに造林してあつてもかまわずに……)と聞いた。

た。「モンジャツデ」は「モンジャアルデ」の縮約形である。北山の「モンジャ」を、これらの「モンジャ」、すなわち「ものでは」と理解することは無理であろうか。

3) チャ(ては)

・カカツチャ ナラン ゴー。(熊) 球磨郡五木村大平 老男↓孫 (これを) いじってはだめだぞ。

・ニジカラ オケテ ミズ イレチャー タキ ミズ イレチャー タキシテ……。 (福) 福岡市志賀島弘 老女↓筆者

二時に起きて、水を入れては炊き水を入れては炊いて……。

「て・は」の熟合した「チャ」は、共通語表現における「ては」と同様の働きを担っている。

4) テチャ・デチャ(と・ては)——順接——

・タベラルルゴト ナローテチャ ヒトウスバ サンベングライ
フマンナリマツシェン。(福) 福岡市志賀島弘 老女↓筆者

(麦が) 食べられるようになるためには、一白を三度ぐらい踏んでつかねばなりません。

・エンソク ヤローデチャ ナンゼンエン イルカ。(佐) 唐津市神集島 老女↓中女

遠足をしようとするば、何千円もいることだ。(一九六〇年調査)

このように、「テチャ」は「ては」という未来形に続き、「ては」とすれば、「ては」の意で用いられる。引用の格助詞「と」と「ては」との熟合したものであろう。

5) 〈テチャ・チャ〉(とて・は) 逆接

同じく「テチャ」であるが、以下の文例のものは逆接の接続助詞「とて」と「は」の熟合形であろう。肥前・肥後で聞かれる。

・イクラ トツタテチャ ヨカツ タイ。(佐) 唐津市神集島 老女↓筆者

(魚は) いくら獲ってもいいのさ。

・ムカシノ セイクツツワ ホント イマ カタツタテチャ ウソノゴト アル。(熊) 球磨郡五木村平沢津 老女↓筆者

昔の生活はほんとに今話したところでうそのようだ。(うそ) と思われないだろう。)

筑前筑後域ではつぎの文例に見られるように、「チャ」がこの「テチャ」相当である。

・ソゲン コツ ユータチャ ドゲ スル ナ。(福) 飯塚市八木山 老女↓嫁

そんなことを言ってもしかたないでしょう。

・メガネ カケンチャ メツカル ガノ。(福) 八女市柳島 老女↓老女

眼鏡をかけなくなつたって見えるけどね。

6) 〈きりとは〉(きりとは) (きりには)、ゲタ

共通語表現の副助詞「きり」(限定)は体言「きり」(切・限)

から出たものであろうが、肥筑域では「ギリ」は仮定条件の接続助詞としても働く。接続助詞として働くばあい、筑前・筑後ではこれに「は」「には」を続けるのが一般である。肥前西北域の唐津市神

肥筑方言表現法における「は」助詞の運用

集島でも同様であった。

・ミタギリヤー フシヨゴト アル。(福) 糸島郡志摩村 老女↓老女

(それを) 見ると眼を伏せたくなる。

・ナゴヤン シロカラ ミルギンニヤ ハタケドマ メーンシタジヤ アル モンナ。(佐) 唐津市神集島 老女↓筆者

名護屋城から見ると畠などは眼下に見えるものねえ。

・ハナシテ チョーシノルギニヤ ジョートバッテ ハナシテチュータラ ナカナカ。(佐) 唐津市神集島 青女↓筆者

話しはじめて調子に乗ると上等なんだけれど、「話してくれ」と言われたらなかなか(言えない)。

・ホカノ シナモンバ トルゲンニヤ マタ クジラモ オヨイジクルケン ナ。(佐) 唐津市神集島 老女↓筆者

ほかの魚をとると、また鯨も泳いで来るからね。

・ゴー シタゲニヤ ドゲー ナル ソ。(福) 若松市岩屋 老女↓老女

こうしたらどのようなもの。

・ヨソ イタゲナ ワカル モン。(福) 嘉穂郡穂波村 老男↓老女

よそに行くとかかるもの。

筑前域では「きりには」の熟合した「ゲナ」形をもつともよく聞く。また福岡市の志賀島弘では、「ンニヤ」であった。

・シカノシマ ユータンニヤ シマデス カテ シラン ヒターキカッサル。(福) 福岡市志賀島 老男↓筆者

志賀島と言うと、「島ですか」と、知らない人は聞かれる。

(今は陸続きだのに)

またつぎのように「ゲタ」の一例も得ているが、これは「ぎりとは」である。

。キキヨツタゲタ オモシローシテ。(福) 筑紫郡筑紫野町 老女

↓筆者

聞いていると面白くてねえ。(肥前の人、筑後の人と、こと

ばがそれぞれ違うから)

7) 〈ずナ(ずには)・じナ・でナ・んナ

。イエガ タラズナ ホン シュータクバツカリ タチヨリマス。

(福) 三井郡小郡町 老男↓筆者

家が足りなくて、(今は) たたもう住宅ばかり建っています。

「ずナ」は、打消助動詞の「ず」に接続助詞「に」の続いたものに

「は」が融合した形で、提示性の打消接続表現として働く。また、

「ずナ」と同様に働く「じナ」「でナ」「んナ」がある。

。マタ コンド コレジナ マータ オイデクダサイマセ。

(長) 対馬上県町佐護 老女↓筆者

また今度、(これに懲りずに) またおいでくださいませ。

。シユジンナ シラデナ オル。(熊) 球磨郡五木村 老女↓青女

主人は知らないままだ。

。カゼガ フィチ イカレンナ ヒッカエータ。(福) 甘木市秋月

老女↓筆者

風が吹いて行かずに引返した。

「ジ」は「ず」に、「デ」は「ず」でであろうか。とすれば「に」

を内包する「ナ」をそれらに添えることは重用であるが、「ナ」と

いう接続助詞成分を添えるといった心持ちの用法であろう。「んナ」にはその心持ちが端的に見られる。

五 バシとバツテン

1) 〈バシ(は・し)

「ばし」の出自については、先学に、係助詞「は」に強意の「し」が続き、「は」が濁音化したものとの説がある。また、「ば」は

「をば」の略とする説もある。この語は鎌倉・室町・江戸期には中央語に用いられたが、今日は九州方言に残るばかりのようである。

その分布主域である肥筑域では、老・中年層がつぎのように用いていて、かつての中央語のばあいより、その用法を広げている。

。サケバシ ノミヨツタ 八。(福) 八女市柳島 老男↓老男

酒でも飲んでいたのかい、

。キユーヨーデバシ アルトナ。(福) 福岡市周辺 中女↓青女

(光安紀恵の調査による)

急用なの?

。アンタガ シッキルバシノゴト。(福) 福岡市旧郡部 中女↓娘

(光安紀恵の調査による)

あんたが(そのことを) することができでもするようには。

(できもしないくせに)

「シッキルバシ」は「シキルバシカ」と、カ語尾を添えて言うこともある。反語表現はかつての中央語には見られないようである。

2) 〈バツテン(は・とても)

①フツゴーバ ツカワニヤナランバツテン デマツシエン モン。

(福) 八女市柳島 老男↓筆者

普通語(共通語) を使わねばならないけれども出ませんもの。

②トキドキヤ イキマスバツテ メッタ イカン。(福) 甘木市秋月 老女↓筆者

(八幡市の娘の家に) ときどきは行きますけれどめったに行かない。

③ヒチニン オリマスバツテ ミンナ オヤゴロコ シテ クレマスケー。(福) 福岡市志賀島 老女↓筆者

(娘は) 七人居ますけれど、みな親孝行をしてくれましてから。

このように用いられる「バツテン」「バツテ」には、まず前件提示の働きが認められる。前件を提示しておいて、①文のように全面的に反する後件をつなぎ、また②文のように一部否定する後件をつなぐ。③文では、前件と後件との関係は単純接続あるいは継起とも言ふべきものである。以上のような働きは、共通語の「けれども」「けれど」「相当であり、接続詞としての用法のあることもまた同様である。

肥前・肥後では、「バツテン」「バツテ」が打消形につづいて「ないで」の働きをすることがある。このばあい、後件は命令発想の叙述となっている。

・アスーデバツカリ オランバツテン ベンキョードン センカ。

(熊) 球磨郡五木村野々脇 老男↓孫

遊んでばかりいないで勉強でもしないか。

藤原与一先生著「方言の山野」(文化評論出版 一九七三年)に、天

肥筑方言表現法における「は」助詞の運用

草の地にこの種の「バツテ」のあることが記されている。また長崎県北松浦郡鹿町大屋免でも「バツテン」をこのようにも用いると、宮田京子姉より聞いている。

「バツテン」「バツテ」には「カラ」をつづけて用いることが多いが、そのさまさまの語形態については、住田幾子氏の「バツテン」の成立と流布(『日本文学研究』第十八号 一九八二年)に詳しい。なお筆者は「カラニ」をつづけたと思えるつぎの例も得ている。

・アミバツテンカラン コン マタ チガウ アミバ イレラス
トタイ。(佐) 唐津市神集島 老女↓筆者

網だけれど、そのう、また違う網を入れなざるんですよ。

「バツテン」の出自については、江戸時代の山崎美成に「ばとて」説がある(『世事百談』巻二 方言)。

柳田国男先生が「ばとてもの早口」と説いておられることは、住田幾子氏が先の論文中に記された。これらのお説では、「バツテン」の「バ」は接続助詞「ば」とお考えのようである。私は、「バツテン」の「バ」は係助詞「は」であろうと考える。前件を「……は」と提示し、「とても」「といっても」「であつても」(と、後件をつないだのではあるまいか。「は」の濁音化は「バシ」のばあいにも見られた。

このように考えていた時、たまたま松尾捨次郎博士が『国文法論纂』(文学社 一九二八年)一四八頁に、「ばってん」の「は」を感動詞と説いておられるのを見た。早くにこのお説のあったことを知らなかった不勉強を恥じている。係助詞「は」も接続助詞「ば」も

その起源は感動の辞「は」であろうとされていることに照らして考えれば、ここに挙げた「バッテン」起源説は相関連するものと言えようか。

六 述部内に働く「は」助詞

「は」は……「形式の述部が多く見られることも、肥筑方言表現法の一特色であろう。この形式のものを、以下に列挙する。

1 「くは」＋「おる」

・オーチカラ キワ、ゴザッタ。(福)三井郡小郡町 老女↓筆者
(子供を)背負って来ておられた。〈回想〉

・コゲンナ カジナ アリヤ オリヨリマツセンヤッタ。(福)筑紫郡筑紫野町 老女↓筆者
こんな火事は以前はありませんでした。

一方に「キゴザッタ」「アリヨリマツセンヤッタ」の言いかたもあるが、このように「は」を置くことも多い。特別の強調意識はないようである。

2 「くんな」＋「おる」

・ナニカ ワカラナナ オリマシタ。(福)甘木市秋月 中男↓筆者
なんだかわからぬままで日を過していました。

・シランナ ゴザルト。(福)糸島郡志摩村 老女↓筆者
御存知ないままなんですよ。

「んな」(んには)については先に述べた。「くんなおる」は、その状態が継続していることを言うものであるが、つぎのように「く

ノル」と縮約されることも多い。

・フネガ デラレンノルツ タイ。(福)宗像郡大島村 中男↓筆者
者

(嵐で)船が出られぬまま碇泊しているんだよ。

・バーチャン ソゲナ コトバー ツカワンノツテ。(福)福岡市志賀島 嫁↓姑

おばあさん、そんなことばは使わないでください。(子供がまねるから)

3 「ありは」・「おりは」＋「する」打消助動詞

・バステューワ アリヤ シマツセズナ。(福)若松市内平尻 老女↓筆者
バスなんてものはありませんでね。

・オジゾーサマノ オリヤ サツシャレンヤッタ。(福)福岡市志賀島志賀 老女↓筆者

お地蔵様がいらつしやらなかつた?

4 「形容詞語幹・さ・は」＋「する」

・アーワイ ホツシャ シトラー。(佐)藤津郡・杵島郡 少男
あいつは欲しそうにしてるよ。

・ウーン ウレツシャ シテカイ。(佐)唐津市・杵島郡 少男
へえ、うれしそうにして。

これらは、藤津郡塩田町、また杵島郡大町町・唐津市出身の学生より教示を受けたものである。福岡県南辺の大牟田市域あたりでもこのように言うようである。

「ホツシャ」「ウレツシャ」は、「ほしきは」「うれしきは」であ

ろう。シク活用形容詞の語幹に接尾辞「サ」を添えて体言化したものを「くはする」と受けて、その状態であることを表現している。熊本県球磨郡五木村下手では、隣家で米をつかせてもらってきた嫁に、老女が

・サゾー セワシユナシヤー シナッタロー ネー。

(お隣は) さぞうるさい思いをなさっただろうねえ。
と言うのを聞いた。

「セワシユナシヤー シナッタ」は「せわしなさはされた」である。五木村では「オカッシャ スッ」(はずかしがる)なども聞いた。

5 「動詞連用形・は」+「エン」・「キラン」・「ナラン」・「イラン」

・オリヤ エントデス タイ。(佐) 唐津市神集島 老男↓筆者
居ることができないのですよ。

・オマツリノ アッデ ミゲ キナハツチュテ ヤッテ クレラス
バツテ イキヤー キリマツシエン。(熊) 球磨郡五木村中村
老女↓筆者

お祭りがあるので見に行らっしゃいと手紙をよこしてください
るけれど行けません。

・シニヤー ナランデ……。(熊) 球磨郡五木村中村 老女↓筆者
死ぬことができません……。

これらは不可能を言う表現である。

・コッ キワ イラン。(熊) 五木村平野 老男↓中男
買って来なくてよい。

これは不必要を言う表現である。

肥筑方言表現法における「は」助詞の運用

6 「……ことは」+「ナイ」・「ナラン」・「イラン」

・モー ハイイ コタ ナイ バイ。(福) 戸畑市 老女↓娘
もう早くはないよ。

・ソゲー タイシテ ムカシヤ ナ、チゴータ コタ ゴザッセン
ヤッタ。(福) 飯塚市八木山 老女↓筆者
そう特別に、昔はね、違っはいいませんでした。

・ウマレテ クリヤ フトラカサン コタ ナラン。(福) 遠賀郡
岡垣村吉木 老女↓筆者

生まれてくれれば育てないわけにはいかない。

・サオグ コタ イリマツセン。(福) 遠賀郡芦屋町山鹿 老女↓
筆者
騒がなくていいのです。

・ハル マツ コター イロー カ。(福) 福岡市志賀島 老男
春まで待たなくてもよい。

これらの表現では、「……ことは」と、前接部を体言化して提示する
ところに特色が見られる。筑前域でよく聞く表現である。

7 「くぐらはいはいろうか」

・イバリグリヤー イロー カイ。(熊) 球磨郡五木村 老男
いばらなくてもいいじゃないか。

この表現を教示した老男は、これは「イバリカタ イラン」と同じ
意味のことばであると言った。

8 「動詞連用形・ては」+否定語

・ジサンナー ツレチャー イカンチュー モン。(福) 八女市
柳島 老男↓老男

おじいさんは連れて行かないと(孫が)言うもの。

・モツ|チヨツ|チャ ネー|ナ。(福) 若松市岩屋 老男↓老男

(魚の餌を) 持っておられませんか。

この一文の「チャ」の中にある「て」は、いわゆるテ敬の「テ」である。共通語表現でも、「書いちゃだめ」のように「チャ」を言うことはあるが、肥筑域におけるほどに一般的ではない。

9 「……ことでは」・「(ト) (準体助詞) では」+「ない」

・ヤオイ|コツ|チャ ナカ。(福) 糸島郡志摩村 老女↓老女

楽じゃないよ。

・ナン|モカ|モ アツタ|コツ|チャ ナカ。(熊) 球摩郡五木村中村

老男

(男の子だから乱暴で) 何でもみな、手当たり次第こわしてしまおう。

・キョー|カエラツ|シャルツ|チャ ナイ|デス カ。(福) 宗像郡大

島村 老女↓筆者

今日お帰りになるんじゃないですか。

「……ではない」「……のではない」の言いかたは共通語表現の上にも見られるが、その部分の形態に、また、この表現を多用する点に、肥筑域方言の特色が見られる。

10 「()では」+「ある」

・ウミ|デ カ|コマ|レトル|ケン|デ、フイ|ナル|ト ウミ|ガ ヌツ|カモ
ン|ジャ アル|ケン ナ。(佐) 唐津市神集島 老女↓筆者

(島は) 海に囲まれているので、冬になると海が暖いもんだからね。(「島は暖いですね」への答である)

・ヨカ|ヤド|ジャ ゴザイ|マス ナ。(福) 甘木市安川町 老男↓

筆者

(あの宿は) よい宿でございますね。

「……では」は熟合して「ジャ」となる。筑後域では「……シャル」は「……ジャン」、肥後では「……ジャツ」と縮約されることが多い。

・コノ|ヒト|ガ ヒトツ|ジャン。(福) 八女市柳島 老女↓筆者

(このように修理できるのは) この人が一人だよ。(この人だけだよ)

・ソリ|ヤ オド|ンガツ|ジャン デー。(福) 八女市福島 老女↓筆

者

それは私のだよ。

・ジャツ|トー。(熊) 球磨郡五木村下手 老女↓孫嫁

そうだよ。(相手のことばへのうなずきのことば)

「()は……」形式の述部はこのように多用されている。

おわりに

肥筑方言表現法における「は」助詞の頻用は、この方言に提題性の表現の榮えていることを意味している。言うまでもなく共通語表現においても、とりたてて、や、強調の意図をもって「は」助詞が用いられている。肥筑方言表現法では、そのような心意のない時にも、とかく「()は」と言いがらである。

提題性の表現は、換言すれば客体化表現である。修飾部を客体化し、また述部内にも客体化表現を見せるところに、肥筑方言表現法

の一特色を認めたい。客体化表現はまた体言化表現と言うこともできる。「は」は、本来、体言あるいは体言資格の要素を受ける助詞である。

藤原与一先生は、「九州弁の表現法」(佐藤泰正編『日本人の表現』笠間選書109 一九七八年)に、「名詞的表現法」をとりあげられた。たとえば「コン ミズノ ツンタサー」(この水、つめたいね。)などである。また「飲ミカタデヤヒタ」(飲みました)などをあげて「体言化表現法」を説かれた。また神部宏泰氏も、「方言基質論序説—九州方言の基質について—」(『佐賀大学教育学部研究論文集(1)一九七九年)に、体言化傾向を九州方言の重要な基質と論じていられる。その体言化傾向を見せるものとしてとりあげられているのは、文末詞「バイ」の成立とその発展、カ語尾形容詞、主格助詞「ノ」の盛行である。

私は、このように指摘される諸事例に加えて、「は」助詞の類用、運用もまた「体言化表現法」の分類と考えたい。「体言化表現法」の視点に立てば、たとえば、佐賀の三拍子、と言われる、三回くりかえしの副詞などもその一つとしてとりあげることができよう。「オロオロオロデ ウロタエオンシャツ」(おろおろとあわてていらっしやる)へ(佐)鹿島市北島素子氏の報告による)などがそれで、「(ノ)デ」による客体化が認められる。また、筑後の八女地方には、理由を言う接続助詞「ケン」類に、「(ノ)ケン」、「(ノ)ケンデ」、「(ノ)ケンデ」がある。「ノ」で客体化したものに「ケン」を続け、あるいは「ケン」の続いたものを「デ」で客体化して下に続けていくのである。

肥筑方言表現法における「は」助詞の運用

文末で一文全体を体言化する一方に、文中の諸話部をそれぞれ体言化していく表現法もあることを、肥筑方言表現法の一特質と見たい。